

絵本における自己表象

A Study of Self-Representation in Children's Picture Books

児童学科

今田 由香

Dept. of Child Studies

Yuka Imada

抄 録 絵本における自己を表象する表現のタイプと機能について調べた。絵本の選定には、国立国会図書館国際子ども図書館が提供するデータベース「児童書総目録」を用い、図書館や書店で現物を調査した。自己表象の判定には2つの基準を設けた。フィリップ・ルジュンヌの「自伝契約」という概念を援用し、作者がそれを自己表象であると作品の内外で述べていること、つまり読者に「自己表象契約」をしているか否かを第1の基準とした。さらに作者の肖像写真と絵本に描かれた人物とがよく似ている場合も、自己表象として取り扱った。選定と認定の結果、自己表象のみられる絵本が24作あった。これらについて、自己表象の方法の種類を調べた。その結果、1) 自伝的な物語、2) 自画像、3) 思い出の品のコラージュ、と3つのタイプがあることがわかり、それぞれの特長と絵本における自己表象の意味を論じた。

キーワード：絵本、自己表象、自伝的な物語、自画像、思い出の品のコラージュ

Abstract The purpose of this study is to investigate types of self-representation used in children's picture books, and how they function. The materials for study have been selected from a database called *Jidōusho sō mokuroku* by the International Library of Children's Literature, in addition to fieldwork in a number of libraries and bookstores. Self-representation in picture books can be categorized in two ways. One is the author's statement of self-representation, the idea of "self-representation contract" based on Philippe Lejeune's "autobiographical contract". Another is the resemblance between a drawn character and the photograph of the writer. Classifying picture books according to self-representation, three types are found as follows: 1) autobiography, 2) self-portrait, 3) reminiscence. The features and meanings of each type of self-representation are discussed.

Keywords : picture book, self-representation, autobiographical picture book, self-portrait, reminiscence

1. 研究の目的

筆者はトミー・ウンゲラー (Tomi Ungerer, 1931～) の物語絵本に関心をもち、研究を続けている。「どの作品にも私がいる」(*1) と語るウンゲラーは、これまで自伝的な物語を多く語ってきた。ストラスブルからニューヨークへ移住した時の驚きや疎外感を反映した『月おとこ』(1966)、母親の過剰な愛情をもてあました日々を描いた『キスなんてだいきらい』(1973)、少年期に彼が巻き込まれた第二次世界大戦を思い起こさせる『あおいくも』(2000) や『オットー 戦火をくぐったティディベア』(1999) な

どである。物語に個人史や経験を反映させるだけでなく、『マッチ売りの少女 アルメット』(1974) には自身の顔写真をコラージュし、『ラシーヌおじさんとふしぎな動物』(1971) では、国籍という枠組みに苦悩した彼の経験を想起させるような、修繕された枠を繰り返し描いた。

絵本で自己を表象するというこれらの表現に、独自性を認めることができるだろうか。考察を試みたところ、ウンゲラーの作品に限らず、絵本における自己表象に関して先行研究をみつけることができなかった。そこで本稿で、自己表象のみられる絵本を調査し、考察する。

2. 方法

1) 絵本の選定

絵本の選定にあたり、国立国会図書館国際子ども図書館が提供する公式サイト (<http://www.kodomo.go.jp>) からアクセス可能なデータベース「児童書総目録」を利用して情報を収集した。これは、国際子ども図書館、国立国会図書館及び、大阪府立中央図書館国際児童文学館（旧大阪府立国際児童文学館）、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館が所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる目録である。「児童書総合目録」のあらすじの項目に「自伝」、「絵本」というキーワードを入力して検索したところ、2010年9月10日現在12件がヒットした。この情報をもとに、図書館や書店で作品を調査した。絵本の視覚的な情報を収録したデータベースは見つからなかったため、自画像や象徴的なモチーフが描かれた絵本については、既読の作品から選定した。

2) 自己表象の認定

ある表現を作者の自己表象であると認めるにあたり、本稿ではフィリップ・ルジュンヌが『自伝契約』（1975）のなかであげた、自伝文学の定義のひとつ、「自伝契約」を参考にし、「自己表象契約」という基準を設けた。「自伝契約」とは、作品内で作者が「これは自伝である」と、何らかの形で読者に告げることである。本稿では、「契約」の場所を作品外にも認めることとし、絵本の袖や帯等を含む作品内部に作家や画家の自己表象が含まれると明記された作品、及び、作家や画家がインタビュー等でその作品に自身の経験を反映させていると明言した作品を、「自己表象契約」がなされた絵本と認めた。

3) 分類

以上のような選定と認定の結果、自己を表象する表現を認めうる絵本を抽出した。さらに、表現方法によって分類し、それぞれの特徴を考察した。

3. 結果と考察

選定と認定の結果、自己表象の表現が確認できる絵本は、Table 1に示したように24作みつかった。

まず、自己表象契約がなされながら、考察の対象から外した作品について触れておく。トミー・ウンゲラーの絵本は別の機会に論じることにし、除外した。また、作家自身の経験ではなく、自身のルーツを語った絵本も対象から外した。例えば、アレン・セイが両親の人生を語った“Tea with Milk”（1999）である。また、作品の奥付から伝記と判定した絵本もある。サッカー選手ロベルト・カルロスの自伝絵本として販売される『ちいさくても大丈夫』（中谷綾子・アレキサンダー文、はまのゆか絵、2007）は、カルロスに取材した聞き書き形式の伝記絵本であるとみなし考察の対象から外した。

次に、自己表象の表現が確認できた24冊の絵本について述べる。表現に注目すると、1) 自伝的な物語、2) 自画像、3) 思い出の品のコラージュ、という3つの形式があることがわかった。24冊のうち、自伝的な物語が16冊、自画像が12冊、作者の思い入れがある事物のコラージュが2冊の絵本でみられた。なお複数の表現がなされた絵本も多くある。以下、それぞれの形式の特徴を、作品例とともに考察した結果を述べる。

1) 自伝的な物語

分類の結果、最も多かった自己表象の形は、作者の個人史を反映した自伝的な物語であった。Table 1の「分類」に「自伝的な物語」と記した絵本、16冊が該当する。ただし、今回の調査は、情報収集の方法に課題を残すものであり、数値の高さは再度検証する必要がある。しかし、16冊の全てにおいて子ども時代、とくに幼少期の経験が語られたことは注目に値する。

語られた経験の内容をみていくと、大きく2つの傾向があるとわかった。幸福な経験と困難さを抱えた経験である。子ども時代の幸福な経験を描き、懐かしく追憶する絵本には、温かな空気が流れる。銅版画家、山本容子による『おこちゃん』（1996）には、おてんばな子ども時代のほのぼのとしたエピソードがちりばめられている。幼馴染みである、トランベッターの近藤等則と日本画家の智内兄助が、瀬戸内海の島で過ごした日々を描いた『ぼくがうまれた音』（2007）には、島の風景や彼らの子ども時代を彩った風俗や玩具が描きこまれた。ウィリアム・スタイグの『みんなぼうしをかぶってた』（2003）には、20世紀初頭、移民の子どもとしてニューヨー

クで育ったスタイグが出会った大人たち、その姿が率直かつユーモラスに語られた。またトミー・デ・パオラは『絵かきさんになりたいな』(1989)で、子ども時代の素敵な先生との出会いを描いた。いずれも小学校低学年頃の経験に焦点をあて、作家が生きた日々を、瑞々しく、ユーモラスに語る。また当時の風景や風俗が作品のなかに描きこまれた点も共通する。

このような幸福な幼少期の記憶を描いた絵本が出版される一方で、困難さを抱えて生きた作家の自伝的な物語絵本も多くある。自伝的な物語と分類した16冊のうち、10冊が該当する。作品の特徴を示すキーワードをTable 1に示したが、母との死別2冊、父との死別1冊、祖母との別れ1冊、母の病気2冊、戦争3冊、障碍1冊、食品公害による健康被害1冊と、困難さを抱えた子ども時代の経験が描かれた。このなかから、長谷川集平の『はせがわくんきらいや』(1976)、イロン・ヴィークランド絵、ローセ・ラーゲルクランツ文『ながい ながい旅 エストニアからのがれた少女』(1995)、アビゲイル&エイドリエン・アッカーマンの『おかあさんが乳がんになったの』(2001)、の3冊をとりあげる。

●長谷川集平『はせがわくんきらいや』(1976)

長谷川集平は、食品公害を扱ったこの絵本でデビューした。1955年から、森永乳業徳島工場で製造された粉ミルクにはヒ素合成物質が含まれていた。これを飲んだ乳児は、脳性まひ、知的発達障碍、精神疾患等心身に異常を発し、多くの死者が出た。長谷川集平も森永の粉ミルクを3缶のみ、乳幼児期に発達不良と心身の不調に苦しんだ。まわりにはもっと酷く苦しんだ子どもたちが大勢いたと、絵本のあとがきで長谷川は語った。

物語はある男の子の語りで進行する。彼の同級生「長谷川くん」は身体が弱く、幼稚園に初登園したときはベビーカーに乗っていた。あとがき、名前、そして「長谷川くん」が「S」というイニシャルを刺繍した服を着ていることなどから、これが長谷川集平の経験にもとづいた物語であるとわかる。しかし長谷川は被害者の想いではなく、彼をとりまく人々の声を絵本に描いた。

語り手の少年にとって「長谷川くん」は何もできない「めちゃくちゃ」な存在である。「長谷川くんきらいや」と吐き出しながら、それでも

「長谷川くん もっと早うに走ってみいな。

長谷川くん 泣かんときいな。

長谷川くん わろうてみいな。

長谷川くん もっと太りいな。

長谷川くん ごはんぎょうさん食べようか。

長谷川くん だいじょうぶか。長谷川くん。」

と語りかけ、「長谷川くん」を背負いながら、山に登り、公園で遊び、野球に誘う。この少年は、「長谷川くん」がいつか「まとも」になると信じている。偽善や同情ではなく、つきあってくれたこの友人の存在を、長谷川集平は絵本に描き残したかったのではない。そしてもちろん、同じ被害で苦しみ命を落とした、多くの乳児とその養育者たちの存在を語らなければならないと感じたのであろう。それは2つの強烈な表現で伝えられる。

ひとつ目は、見返しにならんだ無数の哺乳瓶である。中川素子によると、長谷川は、アンディ・ウォーホルの「キャンベル・スープ」を羅列したポップ・アートのように、哺乳瓶ではなく、粉ミルクの缶を描き残したと語ったことがある(*2)。森永ラベルのミルク缶の数は、被害者の数を想起させ、また名もなき被害者の抗議の声をより強く響かせたかもしれない。なぜ缶ではなく哺乳瓶になったかはわからない。ミルク缶よりはインパクトが小さいが、哺乳瓶が規則的に並ぶ光景は、多くの赤ちゃんの存在を思わせ、大量生産、コスト重視の体制で毒物の混入を見逃した企業の罪を静かに糾弾する。

2つ目は、同級生の少年が、「長谷川くん」が「あんなにめちゃくちゃ」な理由を彼の母親に問う、その答えとして9場に描かれた大きな粉ミルク缶である。商品名や製造場所もはっきりと書かれており、この物語が事実をもとにしていることを示す。さらに次ページに見開きで描かれた、苦しみ倒れる子どもの裸体と、「あの子元気な方なの。もっとひどい人や死んだ人もぎょうさんおってんよ。」という母親の語りは、このミルクが与えた、子どもとその養育者の苦しみを強く伝える。

●イロン・ヴィークランド絵、ローセ・ラーゲルクランツ文

『ながい ながい旅 エストニアからのがれた少女』(1995)

『ミオよ わたしのミオ』(1954)の挿絵でデビューし、以来、アストリッド・リンダグレンの作品の挿絵を多く手掛けたイロン・ヴィークランドの子ども時代を描いた絵本である。両親の離婚により、母

方の祖母の家で暮らしていた少女は、戦争がはじまると、父方の祖母が暮らすエストニアにひとりで疎開することになる。友人に恵まれ、豊かな子ども時代を過ごす、やがてエストニアはソ連邦とドイツの争いの地となり、危険を感じた祖母は少女をひとりで避難させる。彼女は過酷な航海の末に、救助船の助けを得て、他の避難民とともにスウェーデンに辿りつくが重い病に倒れる。幸運にもおばと巡り合い、画家である彼女から絵を描くことの楽しさを教わる。表現することで、少女は心身の健康を取り戻し、やがて絵を描くことを仕事にした。絵を描くことで、少女が回復する過程に、なぜイロン・ヴィークランドが子どもの本の画家になり、自伝的な物語を出版しようと思ったかの答えがあるように思う。

少女が回復期に描いた何枚もの絵のなかには、兵士に銃殺された愛犬や、避難のために乗船した海の風景などがあつた。辛い思い出から目をそむけず、それらを描出することで病を克服したこの少女には表現者としての資質があつたといえる。少女が作者ヴィークランドであることは、物語の途中で明かされ、この物語が事実に基づいたものであると読者は知る。現実には少女がこのような過酷な日々を送ったことに改めて、心を痛めるとともに、彼女が大人になり絵本作家として活躍していることも知り安堵も覚えるだろう。

●アビゲイル&エイドリエン・アッカーマン 『おかあさんが乳がんになったの』(2001)

この絵本の帯には「9歳と11歳の女の子がつくった家族友人みんなの闘病絵本」とあり、絵本のカバーの袖では、「アビゲイルとエイドリエンが、お母さんが“がん”になったことをお母さん本人から告げられたとき、ふたりはこわくて心配になりました。お母さんにどんなことがおきるのか、そしてどんなことが予想されるのか。それについて書かれた本を探してみましたが見つかりませんでした。そこで、自分たちが本を書いてみることにしました。」と説明される。

ふたりの少女の母は乳がんを患い、化学療法の副作用で髪が抜け落ちてしまう。だが、おばが帽子パーティを開くことを思いつき、みんなが集い13個もの帽子が集まり、髪の毛の歌を唄って母を励ます。このように、母親の病気による生活の変化が率直に語られ、描かれていく。例えば化学療法が終了したあと、今度は母親に何色の髪の毛が生えるのか

とみんなで想像したと語られる。アビゲイルとエイドリエンの家族が周囲の人々に支えられながら、闘病による母の、そして生活の変化にひとつひとつ前向きに対応していった様子が綴られる。アビゲイルとエイドリエンのように、病気についての絵本を必要とする子どもは多くいる。肉親の闘病を支えた子どもたちの実話である本書は、日常を脅かす事態を悲観するのではなく、ユーモアをもって対処した大人と子どもの記録として貴重である。

以上のように自伝的な物語絵本の内容は多岐にわたる。作者の人生はみな違い、その数だけ表現できるものがあるということだろう。自伝的な物語絵本には、子ども時代が多く描かれる。また幸福な想い出よりも、困難さを抱えた日々についての絵本が多くあることも明らかになった。これはなぜか。

ピーター・ホリンデイルは、著書『子どもと大人が出会う場所』(1997)において、子どもの本の作家は、「彼ら自身のなかで生きられなかった子ども時代の欠落感を満たすために」子どもの本を書くのではないかと推論した(*3)。しかし、自伝的な物語を描く絵本作家にはこのことはあてはまらないのではないか。例えば長谷川集平の『はせがわくんきらいや』には、自分と被害者である子どもたちへの想いと、それを引き起こした事件への怒りが込められていた。しかし、それは、欠落感を埋めるためというよりは、そのような被害を、実名で、自身の経験として描くことに、表現者としての使命を感じたからのように思われる。ではなぜ絵本を表現の媒体として選んだのか。それは過酷な現実を懸命に生きる子どもたちの存在に光を当てるためであろう。だれもが平和で幸福な子ども時代を生きるわけではない。過酷な日々を生き抜く子どもたちに、困難さを抱えた子どもは君だけではないと伝えるために、事実という重みをもった自伝的な物語は大きな意味をもちうる。

2) 自画像

自画像が描かれた絵本は、24冊のうち半分の12冊を数える。自伝的な物語とともに作者の子ども時代の姿が描かれることが多いが、大人である作家が登場する絵本もある。デイビッド・ウィーズナー『かようびのよる』(1991)、荒井良二『うちゅうたまご』(2009)、ロベルト・インノチェンティ『ラストリゾート』(2002)には今を生きる作家の姿が登

場する。これら3冊における自画像という表現について考察する。

●デイビッド・ウィーズナー『かようびのよる』(1991)

ある火曜日の夜に蛙が空を飛んだという、不思議な出来事を描いた絵本である。3匹の蛙が沼にいる平凡な情景から始まるが、やがて日常に切れ間が生じる。1匹の蛙が空に浮き始め、間もなく残りの2匹も浮かぶ。そして数時間も経たないうちに何百もの蛙が蓮の葉に乗って、夜空を飛行するようになる。蛙たちは大はしゃぎで町を飛び回るが、目撃者はほとんどいない。だがこの現象は長くは続かず、夜明けとともに蛙は空を飛ぶ能力を失い、慌てて沼へと帰っていく。「あるかようびのよる」と語り始めるが、そのあとは絵と構成のみで見せていく。この絵本で示されるのは、曜日や時刻のみである。巧みなカット割り、臨場感のある画面を創出し、蛙たちの不思議な一夜を描き切った。

この出来事の目撃者はほとんどいないと述べたが、窓越しに蛙の飛行を見ていた男性がいた。キッチンで夜食のサンドウィッチを食べていた男、そのモデルはウィーズナーである。このことは絵本の最後、作家紹介で明かされる。

また、『世界でいちばん愛される絵本たち 人気作家30人のインタビュー集』(2000)で、ウィーズナーは、『かようびのよる』の登場人物は、「私を含めた身近な人をモデルにしている」と答えた(*4)。彼が実在する人物、しかも身近な人々をこの絵本のモデルに選んだのは、物語のリアリティを強化するためであろう。ウィーズナーが目指したのは、現実と隣合わせのファンタジー、ルネ・マグリットが描いた絵画のような、見る者を戸惑わせる、見慣れた風景の異化であった。そのため、ウィーズナーは表紙の時計台の模型をボール紙で創り、ライトで照らして、月の位置によってどのように影ができるのかを検証したり、カエルの粘土模型を創り、上からぶら下げて、その影が塔にどう現れるのかを調べたりし、奇妙だがありえそうな風景の描出に挑戦した。

●荒井良二の『うちゅうたまご』(2009)

「うちゅうのかあさん」から生まれた「うちゅうたまご」。その卵の中から地球に関わるたくさんのものが誕生する、と語る絵本である。荒井良二独特の、愛らしさと激しさと、生命感があふれる絵がさく裂する。創作の過程が変わっている。2メート

ル×4メートルのキャンバスに何の設計図もなしに絵を描いていき、3時間かけて、描いては撮り、描いては撮り……そうやって撮影した膨大な写真の中から、どれを使うかを選んで、そこから物語を考えて完成した。ライブペインティング、つまり即興で絵を描いた結果誕生したので、「ライブ絵本」と名付けられた。

Webコミュニティサイト「ミーテ」に2009年9月1日に掲載された、「ミーテカフェ インタビュー Vol. 37 (http://mi-te.jp/contents/cafe/portal_archivecontents.php?c=1&b=1&e=509 最終アクセス2010年9月12日)のなかで、荒井良二は『うちゅうたまご』の制作について語り、「僕自身が登場してるページもあるんですよ」と明かした。荒井の姿は、この絵本にたくさんみつかる。中表紙にも、物語の途中にも荒井が登場し、そして最後には荒井良二が現場に現れ、絵を描き終わるまでの様子を記録した写真が掲載された。「ライブ絵本」というコンセプトに、絵本を即興で生みだした作家の姿は欠かせない。この絵本では、即興で絵を描いた証拠として、自画像が登場した。

●ロベルト・インノチェンティ 絵、J. パトリック・ルイス 文『ラストリゾート』(2002)

『ラストリゾート』は、「どんよりと曇っていた日だった。わたしの想像力がどこかに行ってしまったのに気がついた」という、画家の独白から始まる。表紙のあとに続くのは、ペンを手に浮かぬ表情をする画家のバストショットである。間もなく画家は、地図を広げ、旅支度を始める。そして愛車のルノーに導かれて辿りついたのは、海辺のホテルであった。そこには、怪しげな、しかしどこかで出会ったことがあるような人々が滞在しており、みな何かを探していた。

この絵本には謎解きの楽しさがある。読者は、宿泊者の風貌や、眩きをヒントに、彼らの正体を探ることができる。ハックルベリー・フィンや、サン＝テグジュペリ、他にもインノチェンティが影響を受けた人々が集う。あとがきには答え明かしがあり、この想像力を失った画家についても「わたしこと、ロベルト・インノチェンティです。この本は、どこかへ行ってしまった想像力をみつけるまでの、わたしのお話です」と教える。この画家の姿は確かにインノチェンティに似ており、彼の姿を知る読者は、これが彼自身の物語であると早くに気づくだろう。

宿を去る際に、ここにきた目的を尋ねられた画家はこう答える。「ところが思い描くものを現実のものにする力を得るためです」。物語は空想的であるが、インノチェンティが感銘を受け、今も彼の心に住む偉大なる先人や彼らが生み出した人物との交流は、作家のなかでは現実以上に影響力をもつものであり、インノチェンティがそれらからインスピレーションを得ていることは事実であろう。想像の力を伝えるために、インノチェンティは彼自身として絵本に登場したと思われる。

以上、大人である作者の姿が登場する絵本の例をみた。3冊は趣向の違う絵本であるが、現実と想像の世界の両方を同じ強度で生きる作家による絵本である点は共通する。何かを生み出すことの過程を作家自身の姿で伝えるために、自画像という表現が選ばれたと推察できる。

3) 思い出の品のコラージュ

最後に、思い出の品をコラージュした絵本をとりあげたい。2作しかみつからなかったが、自己表象の表現としては大きな可能性をもつ。「コラージュ」とは、フランス語で「糊で貼る」という意味をもち、絵画に絵具以外のものを貼りつけることで、作品を多義的かつ立体的に創造できる手法である。自己表象ではないため今回の考察対象にしなかったが、例えばジーニー・ペイカーはオーストラリアのクイーンズランド州北部に広がる森でフィールドワークし、収集した枝をコラージュして、その森を舞台にした絵本『森と海のであうところ』(1988)を描いた。作者にとって意味のある背景をもつ素材を作品のなかに取り入れることは、素材に刻まれた記憶が作品のなかで活かせることであり、自己を表象する表現として興味深い。

●智内兄助絵・近藤等則文『ぼくが生まれた音』(2007)

作者の思い出の品々を詰めこんだ絵本に『ぼくが生まれた音』がある。智内兄助と近藤等則は愛媛県の今治市に生まれ、来島海峡の渦潮の音を聞いて育った同級生である。この絵本にはふたりの子ども時代を彩った事物、メジロ、浪曲ライブ、船、ラムネ、かき氷、モンキー自転車、鉄人28号やベコちゃんのキーホルダー、月光仮面、メンコ、ブリキの玩具等が、それらが発した音とともに描き込まれた。石井光恵が「それらに託された時の記憶。時への執

着が、モノに象徴されて浮かび上がってくる」と述べたように、これらは彼らの時代を感じさせるものばかりである。海や自転車を写した写真も多く取り込まれているが、「瀬戸内海の情景を写した写真を潜りこませ、故郷への思いをちらつかせてもいる」とも石井は指摘した。自伝的な物語だけではなく、作者たちの幼年期と深く関わる事物を画面に配することで、彼らの過去はいくつかの語りの可能性をもって蘇生される。その行為に「自分の過去にも、ロマンを見ようとする心性」を石井はみる(*5)。自己表象することで、自分という存在を確認し、捉え直す。思い出の事物のコラージュは、自分の存在の意味と可能性を、過去から再発掘しようとする行為ともいえる。

4. 結論

本稿では自己を表象した表現がみられる絵本を調査し、表現のタイプを調べ、その特徴を論じた。また絵本における自己表象の意味を探った。24作品を表現の形式ごとに分類すると、自伝的な物語が16冊、自画像が描かれた絵本は12冊、作者の思入れがある物がコラージュされた絵本が2冊あった。複数の表現が用いられた作品も多くあった。次に、それぞれの表現の形式ごとに、いくつかの例を考察し、その特徴を明らかにした。

自伝的な物語の絵本には、作者の子ども時代、とくに幼年期の経験が描かれることが多く、経験の内容は大きく2つに分けられた。ひとつは輝かしい幸福な子ども時代である。作者は子ども時代を懐かしみ、ユーモアと愛情を込めて個人史を語った。一方、子ども時代に困難な状況におかれた経験をもつ作者たちも自伝的な物語絵本を作っていた。両親の離婚、病気、他界、戦争による被害、人種差別、食品公害、障碍などを幼くして経験した作者たちは、それらを物語として語り、過酷な日々を生き抜いたかつての子どもとして、多くが実名で絵本に登場した。これは同じように過酷な状況を生きる子どもたちに勇気を与える自己表象であろう。

自伝的な物語には、作者の自画像も描かれることが多かった。だがそれだけではなく、大人である作者が登場する絵本も存在するとわかった。自伝的な物語が過去を扱うのに対し、それらは今に焦点をあてる。創造することの意味や過程が作家自身の姿で伝えられており、絵本を生み出す作者たちのドキュ

メントになっていた。

最後に作者の思い出の品のコラージュという表現に注目した。過去を描くことは、自らを捉えなおすことでもある。思い出のつまった事物を絵本の世界に持ち込むことで、事物が内包する時間や記憶が封印を解かれ、自分が記憶から紡ぐ物語だけではない過去を語ることを作者は期待しているようであった。それは自己を捉えなおすための、自己表象であるといえる。

以上のように絵本における自己を表象する表現は、読者だけでなく、作者にとって大きな意味をもちうることが示唆された。今回の研究は定性的なものとなったが、調査方法の見直しを行い、今後はより客観的に表現の傾向を捉えたいと考える。その上で、トミー・ウンゲラーの絵本における自己表象について研究する。

註

- * 1 今江祥智，遠藤育枝（翻訳・監修）：Tomi Ungerer :Story Teller トミー・アンゲラーの絵本論，ヤマハミュージックメディア（Weston Woods, 1981）に附された小冊子 p.2.
- * 2 中川素子：絵本は小さな美術館，平凡社，pp.34-36（2003）
- * 3 ピーター・ホリンデイル：子どもと大人が出会う場所，猪熊葉子（監訳），柏書房，p.170（2002，原著1997）
- * 4 世界でいちばん愛される絵本たち—人気作家

30人のインタビュー集，白泉社，pp.29-32（2000）

- * 5 石井光恵：絵本と男たちの饗宴—『ぼくがうまれた音』をめぐって—，女と絵本と男，翰林書房，pp.39-48（2009）

参考文献

- 1) 三浦 篤（編）：自画像の美術史，東京大学出版会（2003）
- 2) 日比嘉高：＜自己表象＞の文学史—自分を書く小説の登場—，翰林書房（2002）
- 3) フィリップ・ルジュンヌ：自伝契約，花輪 光（監訳），水声社（1993，原書1975）
- 4) トミー・ウンゲラー：月おとこ，田村隆一・麻生久美（訳），評論社（1978，原書1966）
- 5) トミー・ウンゲラー：キスなんてだいきらい，矢川澄子（訳），文化出版局（1974，原書1973）
- 6) トミー・ウンゲラー：あおいくも，今江祥智（訳），プロンズ新社（2010，原書2000）
- 7) トミー・ウンゲラー：オットー，鏡 哲生（訳），評論社（2004，原書1999）
- 8) トミー・ウンゲラー：マッチ売りの少女 アルメット，谷川俊太郎（訳），集英社（1982，原書1974）
- 9) トミー・ウンゲラー：ラシーヌおじさんとふしぎな動物，田村隆一・麻生久美（訳），評論社（1977，原書1971）
- 10) ジーニー・ベイカー：森と海のであうところ，百々佑利子（訳），佑学社（1988，原書1988）

Table 1 自己表象のみられる絵本

タイトル	作者	タイプ	キーワード	自己表象契約	出版社 (訳者)	原書出版年
1 はせがわくくんきらいや	長谷川集平	自伝的物語	食品公害 子ども時代	作者と主人公の名前が一致 あとがき	2003 ブッキング 初出: すばる書房	1976
2 夜、空をとぶ	ランダル・ジャレル 著 モーリス・センダック 絵	自画像	夜 ファンタジー	絵本のカバー (袖の作者紹介) 自画像	2000 みすず書房 (長田弘)	1976
3 絵かきさんになりたいな	トミー・デ・パオラ	自伝的物語	子ども時代 絵を描く	作者と主人公の名前が一致 絵本の帯 最後の場面	2005 光村教育図書 (福本友美子)	1989
4 かようびのよる	デヴィッド・ウィーザナー	自画像	ファンタジー シュレアリズム	作家紹介で明言 自画像	1992 ベネッセ (当麻ゆか)	1991
5 Tree of Cranes	Allen Say	自伝的物語 自画像	子ども時代 アイデンティティ	絵本の袖 自画像	未邦訳 Houghton Mifflin Books for Children	1991
6 おじいさんの旅	アレン・セイ	自画像	祖父の人生 移民 子ども時代	作品内で明言 自画像	2002 ほるぷ出版 (アレン・セイ、 大島英美)	1993
7 ながい、ながい旅 エストニアからのがれた少女	イロン・ヴィークランド 絵 ローセ・ラーゲルクラントツ 文	自伝的物語	祖母との別れ 戦争 子ども時代 絵を描く	作者と主人公の名前が一致 訳者あとがき	2008 岩波書店 (石井登志子)	1995
8 ローザから キスをいっぱい	ベトラ・マザーズ	自伝的物語 自画像	母の病氣 子ども時代	絵本の帯 まえがき 見返し掲載の作家の写真と名前	2000 BL 出版 (遠藤育枝)	1995
9 おこちゃん	山本谷子	自伝的物語	子ども時代	絵本の帯 絵本のカバー (袖)	1996 小学館	1996
10 オオカミだあ!	サーラ・ファネッリ	想い出の品の コラージュ	差別 擬人化	『世界でいちばん愛される絵本たち』 (白泉社、2000) 掲載のインタビュー記事	1998 岩波書店 (掛川恭子)	1997
11 ありがとう、フォルカー・センセイ	バトリシア・ボラッコ	自伝的物語	隣時 子ども時代	絵本のカバー (袖) 作者紹介 本文の最後	2001 岩崎書店 (香咲弥須子)	1998
12 ババが宇宙をみせてくれた	ウルフ・スタルク 作 エヴァ・エリクソン 絵	自伝的物語	父との想い出 子ども時代	作者と主人公の名前が一致 絵本のカバー (袖)	2000 BL 出版 (ひしきあきらこ)	1998
13 ウィリーの絵	アンソニー・ブラウン	自画像	擬人化 絵を描く 名画へのオマージュ	表紙の自画像 絵本の最終場	2002 ポプラ社 (なかがわちひろ)	2000 walker Books

	タイトル	作者	タイプ	キーワード	自己表象契約	出版年 出版社 (訳者)	原書出版年
14	おかあさんが乳がんになったの	アビゲイル& エイドリエン・アッカーマン	自伝的物語 自画像	母の病気 子ども時代	絵本の帯 著者紹介の写真 訳者あとがき 登場者の名前	2007 石風社 (飼牛万里)	2001
15	ラストリゾート	ロベルト・インノチエンティ 絵 J. バトリック・ルイス 文	自画像	ファンタジー 絵を描く 巨匠たちへのオマージュ	あとがき 自画像	2009 BL 出版 (青山南)	2002
16	いつか空のういで	アンドレア・ベトルリッック ・フセイノヴィッチ	自伝的物語	母との死別 子ども時代 想像力	あとがき	2009 小学館 (まえざわあきえ)	2002
17	みんななほうしをかぶってた	ウィリアム・スタイグ	自伝的物語 自画像	子ども時代	本文 最後の場面に掲載された写真	2004 セーラー出版 (木坂涼)	2003
18	かあさんのころ	内田麟太郎 文 味戸ケイコ 絵	自伝的物語	母との死別 子ども時代 擬人化	絵本のカバー (袖)	2005 佼成出版社	2005
19	ほくがうまれた音	近藤等則 文 智内兄助 絵	想い出の品の コラージュ 自伝的物語	子ども時代	主人公の名前 2010年5月4日開催、第13回絵本学会大会 シンポジウム、一原風景の音と絵―「ほくが 生まれた音」での作者たちの発言	2007 福音館書店	2007
20	The Wall : Growing Up Behind the Iron Curtain	Peter Sis	自伝的物語	戦争 子ども時代 絵を描く	あとがき	未邦訳	2007 Farrar Straus & Groux
21	てんごくの おとうちゃん	長谷川義史	自伝的物語	父との死別 子ども時代	mite (http://mi-te.jp/) 2009.4.14 掲載, 「ミーツカフエ」インタビュー vol.28 インタビュー記事	2008 講談社	2008
22	おとうさんの ちず	ユリ・シュルビッツ	自伝的物語 自画像	戦争 子ども時代 想像力	あとがき あとがきにある写真	2009 あすなろ書房 (さくまゆみこ)	2008
23	うちゅうたまご	荒井良二	自画像	ライブペインティング	見返しの写真 本文の写真 奥付のあとページの写真	2009 イースト・プレス	2009
24	Alenka v kraji divů a za zrcadlem	Lewis Carroll Dušan Kállay	自画像	不思議の国のアリス 鏡の国のアリスを合本し絵本化	あとがきにある写真	合本判は未邦訳	2010 slovart